

上級レベル「日本語演習 A」実践報告

永富 あゆみ

1. はじめに

国際基督教大学日本語教育課程（以下、JLP）では、中級に続く上級コースは J7 に始まり、J8、次いで J9 の 3 つとなっていた。このうち J9 が「聞く・話す」中心の演習 A（Advanced Seminar in Japanese A）と「読む・書く」中心の演習 B（Advanced Seminar in Japanese B）にわかれ、まず、2015 年秋学期に演習 A が開講される運びとなった。本稿では、演習 A における実践を報告し、今後の課題を述べる。

2. 演習 A の概要

2-1 時間割と単位

演習 A は、70 分授業が 3 コマと個別指導 1 コマという一週間の時間割で 3 単位となっている。

2-2 コースの目的

コースオファリング掲載の概要、ならびに目標を表 1 に示す。

表 1 演習 A のコース概要と目標

コース概要：上級のレベルに達している学習者が、日本語を用いて適切・的確にコミュニケーションが図れるようになることを目的とする。さらに、議論、プレゼンテーションを通して日本語母語話者に準ずるアカデミックスキルを身につけることを目指す。

コース目標：

1. 様々な場面に応じて、適切な表現を駆使し、課題遂行ができることを目指す。
2. 論理的かつ建設的な討論ができるようになる。
3. 日本語による口頭発表の仕方を身につける。
4. 語彙・表現の知識の拡張を図る。

3. 2015 年秋学期の学習者

学部生 2 名と、大学院生 1 名の計 3 名が受講した。前者は 2015 年 JLP 夏期日本語教育（以下、SCJ）と当該学期の計 2 学期、後者は当該学期、冬学期、春学期の計 3 学期、留学生として国際基督教大学に籍を置いていた。この 3 名は、アジア国籍の者を含め、北欧あるいは北米の高等教育機関に所属している。

コース開始時記入の日本語学習歴などの調査票の回答、また、SCJ における既習内容から、時事問題に関する討論や口頭発表については既にある程度経験を積んでいること

は明らかであった。その一方で、国際交流基金の「みんなの Can-do サイト」のレベル B2.2 と C1 の Can-do 記述を中心に抜粋・作成した自己評価リストと初回の個別指導から、共通の課題も浮き彫りにされた。それは、会話の潤滑油となり得る「母語話者であれば耳にすることは珍しくないが、授業で扱われる教材には出てこない言い回し」を知らないため、また、発音に自信がないため、社交的なやりとりの中でごちなさを感じているという点である。その結果、場面にふさわしい語彙や表現の選択を困難に感じ、時事問題を通して学んだ漢語を多用する傾向がみられた。

4. コース設計

定延 (2015) が指摘するように、学習者の根本的な望みは情報のすばやい正確なやりとりだけではなく、日本語世界の日常を母語話者と生き、楽しい人間関係を築くところにもある、と考えれば、演習 A の学習目標の 1 と 4 (表 1) は極めて重要であろう。そこで、学習目標 2 と 3 (表 1) に偏りすぎることのないよう、以下の 4 本の柱で表 2 のようにコースを設計した。また、成績の評価は表 3 の通りである。

表 2 演習 A のコース設計

学会発表形式に沿っての口頭発表 (目標 3) 討論 (司会進行役、討議者役) (目標 2、3、4) ディベート (目標 1、2、4) 映画バトル (抽象的な表現と具体的な描写) (目標 1、4)
--

表 3 演習 A の成績評価

期末試験 (講義聴解 & 口頭試験 20、映画バトル 10、ディベート 10) 40% 発表・討論 (発表・司会者としてのレジュメ作成、司会進行、振り返り) 30% 平常点 (スピーチなどのタスク、討論などへの準備・参加・コメント) 30%
--

5. 一学期の流れ

4 つの柱を一学期に亘りどのように展開したかを以下に述べる。一週間のコマは「話し方」コマ、「聴解 (講義)」コマ、「司会・討論」コマならびに個別指導とした。

5-1 学会発表形式に沿っての口頭発表

学習者は、「聴解 (講義)」コマで教師が行った講義の内容のメモをとる。次に、そのメモを基に、各自、空欄が設けられたレジュメを完成する。その後、再度行われる講義で内容を確認し、口頭発表の構成や表現について話し合う。時間に余裕がある場合は、レジュメを見ながら発表を再現する練習も行ったが、基本的には、提示された講義の形式を踏まえ、翌週の「話し方」コマで各自口頭発表を行うという課題を出した。犬飼 (2013) を参考に、序論 (定義、背景説明、問題定義、発表全体の構成の予告)、本論 (複数論拠

提示、分析、考察)、結び(まとめ、今後の課題)から質疑応答へ、一学期を通して部分から全体へと積み上げていき、学期末に各自選択したテーマで口頭発表を行った。

口頭運用能力を上げることを重視するコースであることから、発表中は原稿を用意し読み上げるのではなく、メモあるいはレジュメを頼りに発表することとした。発表は、フィードバックのために録音し、音声ファイルとして保存した。フィードバックは、「音声ファイルを聞いて気づいたことを個別指導の時間に教師と話し合う」あるいは「音声ファイルを書き起こして誤用訂正したものに対し教師がフィードバックを行う」形式をとった。

また、同一データをそれぞれの視点で分析し発表の準備をする、という課題は、発表(「テイク1」)後、お互いの発表を聞き気づいた点を話し合い、教師による発表例も見た上で、改善版(「テイク2」)の自宅録音とその提出とした。この「テイク2」に対し、個別指導の時間に教師からのフィードバックが与えられた。

5-2 司会・討論(司会進行役、討議者役)

「司会・討論」コマの初回で、教師が司会進行例を見せた上で、司会者、また、討議者として有用な表現を紹介した。

一人二回司会者を務める機会が設けられたが、司会担当の学習者は、他の学習者も充分に討議の準備ができるよう、自ら選択した音声ファイルを一週間前までに知らせる。その後、レジュメを作成し、個別指導中に教師からフィードバックを得て最終版を完成する。当日、司会者はレジュメを人数分配布し、60分の持ち時間で「内容のまとめ、質疑応答、討論、まとめ」の討論を進行した。最後に、討議者は司会者へのコメントシート、司会者は振り返りシートに書き込みをしながら、自由に感想を述べ合った。

音源として使用したのは、東京FM「未来授業」である。放送後一定期間を経ると利用できなくなる音源が多い中、さまざまな分野の第一人者が30分ほど語る同番組は、2011年から現在に至るまでのアーカイブから、学習者の専門分野や興味に合ったものを視聴することができる。

5-3 ディベート

「司会・討論」コマで司会者役が二巡した後のコマをディベートにあてた。一般的な時事問題に関するディベートは、このレベルまでに経験があると想定し、ユニークな切り口かつ抽象的な表現に終始していない素材として、TBS ポッドキャスト「Life 白熱教室～これからの"社会"の話をしよう」の以下の4つの議題を活用した。

1. 恋愛格差の解消のため、恋人ができない人に「非モテ給付金」を支給すべきか
2. 若年雇用対策のため、就職のための努力をしなかった若者まで公的機関が雇用すべきか
3. 少子化対策のため、二人以上の子供を作らない夫婦に課税すべきか
4. 世代間格差の解消のため、相続税の税率を100%にすべきか

これらはすべて格差に関するトピックである。まず、ディベート本番では扱わない、上記4を、CALL を利用し全員で視聴し、各自、論拠となり得る情報をメモした。次に、メモをもとに、立論と反論の組み立て方を話し合った。本番では、「審判1名、肯定側1名、否定側1名」を3セット行い、残り3つのトピックを通しすべての役を務められるようにした。それぞれ、自分が審判を務めるトピック以外の音声ファイル2つを視聴し、立論、反論の指定形式に沿って準備を整え本番に臨むよう指示した。1セット38分は、立論（肯定側、否定側各3分）、質疑応答（否定側、肯定側各3分）6分、作戦タイム5分、反論（肯定側、否定側各3分）、作戦タイム3分、最終弁論（否定側、肯定側各3分）、審判のための休憩3分、審判によるまとめと勝者発表3分、という流れになっている。

5－4 映画バトル（抽象的な表現と具体的な描写）

前述3つの柱で重視される正確な情報伝達能力向上のための語彙や表現の拡張は、「日本語世界の日常を母語話者と生き、楽しい人間関係を築きたい（定延2015：7）」という学習者の望みに鑑みれば、必要ではあるが充分ではない。そこで、知的書評バトル「ビブリオバトル」ならぬ「映画バトル」を通し、情景をいきいきと描写する、また、相手との関係に応じ適切な表現を効果的に使う、といった練習ができるのではないかと考えた。

学期開始後に、斎藤（2015）の、他者との対話を促す、映画の持つ役割に関する部分を速読した上で、それぞれ、好きな映画の一場面を自己紹介の一助とし、紹介した。また、荻原・齋藤・伊藤（2008）の『日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』や芝山（2014）などの映画評論を参考に、ジャンルの説明、場面の描写、場面の映画中での位置づけなどの説明の仕方と擬音語・擬態語や慣用表現を学んでいった。「話し方」コマでも、オムニバス映画の一部、未公開映画の予告編、映画評論エッセイなどを用いて、語彙や表現の拡張につながるようにした。また、苦情を言う、交渉するなどのロールプレイも取り入れた。

映画そのものによって日本語能力を高めることが目標ではないため、邦画にはこだわらず、既に公開されており誰でも視聴可能であり、有名すぎないもの、教師も観ていないものを選び、その映画が好きな理由をいきいきと説明することによって、相手の興味をかきたて、その映画が好きな自分にも興味を持ってもらえることを念頭に置くよう指示した。授業で学んだ表現を生かしつつ、ラフ・ドラフトを少しずつ作成し、個別指導の時間に話し合った。ただ、自分の個性を生かす余裕を持たせるため、最終版は教師からのフィードバックなしで各自の創意工夫に任せた。

映画バトル本番の映画紹介5分と質疑応答3分の持ち時間中は、動画や音楽などは禁止で、ポスターやチラシなどの資料1点を頼りに、できる限りスクリプトに頼らず話すこととした。教師の評価とは別に、招待客の投票により、「チャンプ映画」、すなわち、「最も観たくなった映画」が一本決定された。最後に、映画バトル中のパフォーマンスと学期開始時の映画紹介の二つを各自比較し、振り返りシートに気づいた点を記入し提出した。

5-5 個別指導

一人約 20 - 30 分程度、上記 4 本の柱で展開した活動中のフィードバックを中心に行った。特に、振り返り作業で気づかなかった誤用等を掘り下げ、より分かりやすく自然な言い回しになるようにした。その他、学期開始直後に記入した Can-do リストを中間地点と学期末に見直し、今後の学習計画を話し合い、また、それに合わせて発音指導や自習用リソースの紹介も行った。発音に関しては、中川・木原・赤木・篠原 (2015) の『伝わる発音が身につく！にほんご話し方トレーニング 中・上級レベル』や、東京大学のオンライン日本語アクセント辞書「韻律読み上げチュータ スズキクン」の活用を勧めた。

6. 学習者の感想

学期末に実施したコース評価には、暗中模索のコース運営であったことが学習者にも伝わっており、学期初めは期待されていることが分かりにくかったという意見も寄せられた。

一方、個別指導の長さ少人数でのクラス運営については、独学では会話練習の機会が少なく発音の注意点も掴みにくいため有益であったというコメントが全員に共通するものであった。ロールプレイをこのレベルで取り入れることについても、自然な言い回しを学ぶ機会と捉えられたようである。最も困難な作業であったとの声の多かった司会進行に対しても、コミュニケーション能力全般の向上につながったという達成感が述べられていた。

映画バトルに関しては、学期初めの発表と本番の動画を比較した振り返りシートには、アクセントパターンを意識できるようになったが充分とは言えない、全体の構成はよくなったが漢語や硬い表現はまだ多用傾向にある、自分ならではの視点を盛り込めたが場面の雰囲気と映画そのもののメッセージは曖昧であった等、各自の課題の再認識が反映されていた。

7. 結果・考察

演習をこのように A と B に分ける、とりわけ、口頭運用能力向上に特化した A を先に履修する意義は大きい。

異なる専門領域を持つ学習者が、それぞれ、「知識を持ち合わせていない相手にいかに分かりやすく説明し、興味を持たせるか」ということを意識して話す練習になったようである。また、学習者の発話をきっかけに、教師が関連分野の書籍や番組に接し、それを学習者に紹介するというサイクルにもつながった。演習 B に進むのがうち 1 名のみであるため、読み書きを通し更に深く掘り下げる作業に直結しないのは残念であるが、論文執筆という課題に身構える必要がないからこそ、のびのびと各自の興味と強みを追求でき、段階を踏んで口頭発表を重ねることにより論文執筆の際に考慮すべき全体の構成図が体感できたと思われる。

母語でも経験の乏しい司会進行では、一巡目は言葉が全く出なくなり討論に支障をきたす場面もあった。しかし、二巡目はレジュメを含め、自分なりに方略を考えたあともうかがえ、それぞれ格段の進歩を見せた。また、討議者としての準備も、各自しっかり行っ

ていた。東京 FM「未来授業」の音声ファイルの聞き取りには苦勞していないようであったため、学期末のディベート用の音源（TBS ポッドキャスト「Life 白熱教室～これからの“社会”の話をしよう」）のように、異なる討議者が入り乱れ様々なキーワードが繰り返し提示されるものを早い段階で導入してもよかったと思われる。いずれにせよ、司会・討論用、ディベート用の音源は文脈からの類推がしやすく、また、その後の授業で繰り返し耳にしたり口にしたりの機会が得られ、語彙や表現の拡張には効果的であったようである。

映画バトルについては、学期初めは論文調の硬い表現を羅列しあらすじを説明するという傾向が顕著であったが、徐々に、思い描くイメージにより近く適切なものが選択できるよう、抽象的な表現と具体的な描写の使い分けやバランスを意識するようになっていった。また、前掲の「韻律読み上げチュータ スズキクン」は、口頭発表、司会・討論、ディベート、映画バトルすべてにおいて、強い味方となったようで、ピッチアクセントの確認と練習を行って臨んだあとがうかがわれた。

このように、用意周到な準備がされていた反面、即時応答という点には最後まで自信が持てずじまいであったようである。質疑応答、特に答えられない場合の対処法を練習する、また、口頭発表においてはパワーポイントへのキーワードの入れ方を工夫するなど、自分に合った方略を話し合う機会を設けるべきであった。

8. 課題

合計 3 名という少人数の上、うち 2 名が SCJ からの持ち上がりで、開講時に日本語運用能力とニーズがある程度把握できており、個別フィードバックの時間も充分にとれ、4 本の柱でのコース運営が可能となった。しかし、異なる条件下においても、このようなコースが適切かつ再現可能であるとは断言できない。学習者数や学習者間の日本語運用能力の差にかかわらず柔軟に対応できるよう、さらなる検討が不可欠である。

また、口頭運用能力向上に重きを置いたコースではあるが、語彙や表現の拡張のために、さまざまな文脈の中でのそれらの立ち位置に触れられるよう、関連記事や新書からの抜粋などの速読の量を増やすことも望ましい。

そして、目標のうち、特に「様々な場面に応じて、適切な表現を駆使し、課題遂行ができることを目指す」以上、教室という限られた空間に留まることなく、校外学習やゲストスピーカー招待などを通し、ソトとの橋渡しを積極的にすべきである。

最後に、著作権の関係から、適切な音源や映像を探し出すことは一朝一夕にはいかないため、JLP の日本語特別教育コースの上級レベル担当者とのリソースの情報交換も考慮されたい。

参考文献

- 犬飼康弘 (2013)『アカデミック・スキルを身につける 聴解・発表ワークブック』スリーエーネットワーク
- 萩原稚佳子・齋藤真理子・伊藤とく美 (2008)『日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』スリーエーネットワーク

- 斎藤孝 (2015) 『ストレス知らずの対話術』 PHP 文庫
- 定延利之 (2015) 「日本語コミュニケーションにおける偽のタブーと真のタブー」 鎌田修・嶋田和子・堤良一編『談話とプロフィシェンシー ―その真の姿の探求と教育実践をめざして―』 凡人社 pp.6-31
- 芝山幹郎 (2014) 『今日も元気だ映画を見よう 粒よりシネマ 365 本』 角川 SSC 新書
- 中川千恵子・木原郁子・赤木浩文・篠原重紀 (2015) 『伝わる発音が身につく！ にほんご話し方トレーニング 中・上級レベル』 アスク出版
- FM TOKYO 「未来授業」 < <http://www.tfm.co.jp/podcasts/future/> > 2015 年 12 月アクセス
- TBS ポッドキャストینگ 文化系トークラジオ Life 社会時評&サブカルチャー 「Life 白熱教室～これからの“社会”の話をしよう」 2010 年 8 月 29 日放送
< <http://www.tbsradio.jp/life/20100829life/> > 2015 年 12 月アクセス
- 東京大学大学院 工学系研究科 峯松研究室・情報理工学系研究科 廣瀬研究室 「韻律読み上げチュータ スズキクン」
< <http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/phrasing/index> > 2015 年 12 月アクセス
- 国際交流基金 「みんなの Can-do サイト」
< <https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do> > 2015 年 12 月アクセス